

P-055 タニウツギの花部形態と浸透性交雑の程度が結実率に与える影響

○佐藤 崇之¹, 横山 潤²
(¹山形大・院・理工,²山形大・理・生物)

被子植物には近縁種間で交雑を起こす事例が数多く知られている。このような種間交雑の結果生じた個体群の中には、戻し交雑による両親種への遺伝子浸透に寄与するものもあり、被子植物の多様化を考える上で重要な現象の一つである。東北地方に分布するタニウツギ属 *Weigela* のうち、タニウツギ *W. hortensis* とキバナウツギ *W. maximowiczii* は異なる節に属するが、交雑個体を形成することが知られており、特にタニウツギへの浸透性交雑が生じていることも分かっている。本研究では、タニウツギを対象に花部形態と浸透性交雑の程度が、結果率にどのような影響を与えているのかについて検討した。宮城県仙台市および山形県山形市の集団について、花冠の形態を中心に形態計測を行い、自然状態での結実率を調べた。さらに AFLP による遺伝的解析から、キバナウツギからの遺伝的浸透の程度を算定した。その結果、宮城県仙台市の集団の一部では、花冠の形態と結実率との間に相関が認められ、花冠の大きな個体の方が結実率が高い傾向にあった。しかし他の集団では花冠形態と結実率の間に相関は認められなかった。遺伝的浸透の程度と結実率の関係も調べたが、明瞭な傾向は得られなかった。結実率に与える花部形態の影響は、主要な訪花昆虫の種相と関係がある可能性がある。